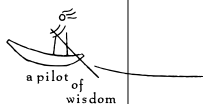


アメリカのプロレスラーは
なぜ講道館柔道に
戦いを挑んだのか
大正十年「サントル事件」を読み解く

藪耕太郎

Yabu Kotaro



まえがき 歴史の中の異種格闘技戦

プロレスや格闘技の世界が異種格闘技戦という試合の形式から遠ざかって久しい。その理由は大きくふたつある。第一に、かつて一世を風靡^{ふうび}した異種格闘技戦はいまや総合格闘技戦（MMA: Mixed Martial Arts）に置き換わった。そもそも異種格闘技戦とは、バックボーンの異なる格闘技を修めた二人の競技者が互いの優劣を共通のルールの下で競う試合形式を指す。けれども、スタイルの異なるふたつの格闘技を、双方の技術を存分に発揮できるように戦わせるためには、試合の禁止条項を極限まで廃さざるを得ず、また選手の生命を危険に晒^{さら}すことにもなる。したがってその完全な実現は不可能だと考えられてきた。ところが一九九三（平成五）年、アメリカで開催されたアルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ（UFC: Ultimate Fighting Championship）という大会が、異種格闘技戦の景色を一変させる。ノー・ホールズ・バード（No Holds Barred）、つまり〈なんでもあり〉を謳^{うた}うこの大会の試合形式こそが、瞬く間に格闘技界のトレンドとなっていたからだ^{*1}。UFCは不可能を可能としたのである

る。

こうして「究極」の異種格闘技戦が追究された結果、旧来の異種格闘技戦は廃れていく。なぜか。極端に制約が少ないルールという名のルールの浸透は、そのルールに最適化したひとつの格闘種目を要請するからだ。ボクシングにレスリング、空手や柔道、その他既存のあらゆる格闘技は、この新たなルールで勝つための最適解ではない。最適解は、既存の格闘技をミックスし、さらに独自の技術を開発した先にあった。ここに総合格闘技という単一の格闘種目が誕生する。言い方を変えれば、異種格闘技戦という形式の果てに総合格闘技が生まれ、そして総合格闘技によって異種格闘技戦は駆逐されたのだ。MMAのリングでは総合格闘技こそが最強。こうしてひとつの答えが出された現在、異種格闘技戦はほとんどノスタルジイの産物でしかない。

第二に、プロレス界の変貌だ。かつての異種格闘技戦には、独特の緊張感とロマンが漂っていたが、そうした要素は、異種格闘技戦の本来的な不可能性の反照でもあった。また、だからこそ異種格闘技戦はプロレスのリングで行われた。なぜならプロレスという非日常のファンタジー空間でのみ、日常の不可能が可能となるからである。とりわけ日本では、プロレスこそ世界一の格闘技だと喧伝した、アントニオ猪木率いる新日本プロレスとその派生団体において、

異種格闘技戦は頻繁に開催された。一九七〇年代から八〇年代を通じて、プロボクサーのモハメド・アリや柔道世界王者のウィレム・ルスカといった大物格闘家がリングに上がったのも、異種格闘技戦がプロレスの試合に組み込まれていたからだ。^{*3}

けれども世紀転換期を通じてその傾向は一気に下火となる。理由のひとつはMMAにおけるプロレスラーの敗戦が続いたことであり、もうひとつはプロレスがショーであることがほぼ完全に自明化したからである。そして、この時期を境にプロレスは自覚的に格闘技と棲み分けを図るようになった。その決断はプロレスに成熟をもたらず。格闘技世界一をめぐる争いに参加することをやめたプロレスは、別の方法で観客を魅了するファイトを確立したのだ。現在においては、よほどの信者かオールド・ファンを除いて、プロレスこそ最強の格闘技だとみなす人はおらず、そしてそれでもプロレスは成立する。いまやプロレスも異種格闘技戦を必要としないのだ。

こうして異種格闘技戦は時代の遺物となった。だからこそいま、それを論じる価値がある。異種格闘技戦にリアリティがあった歴史を掘り起こし、その背景や理由を探るのだ。そして、この作業に打ってつけの出来事がある。一九二二（大正一〇）年におけるアメリカ人レスラーと日本人柔道家との戦いがそれだ。まずは通説的に語られる、この出来事のあらましを示して

おこう。

一九二一年二月末、アド・サンテルというレスラーが来日し、講道館に戦いを挑んだ。この挑戦に応じるか否かで講道館は揺れる。当初、館長の嘉納治五郎かのうは黙許の姿勢を示していたが、幹部の猛反対に遭って寸前で翻意した。ところが講道館の制止を振り切ってサンテルと戦う柔道家が現れ、両者は靖国神社境内の相撲場に設置された特設リングで相まみえる。そして試合後、嘉納は講道館の名の下に彼らを処罰することで幕引きを図った。この一連の出来事を「サンテル事件」^{*4}という。

この「事件」をめぐることは、優れた研究成果がすでにある^{*5}。多くは柔道史の観点から、この出来事を、柔道がスポーツ化する契機や柔道から武術性が捨象される契機として捉えるものだ。それはとても重要な指摘であり、本書を執筆する際にも大いに参考となった。とはいえ、もはや新たな角度から「事件」に切り込む余地がないかといえ、そうでもない。先行研究では、日本／アメリカ、柔道／レスリング、武道／スポーツなどの対照性が鮮明にされている一方で、「サンテル事件」の複雑さや複層性、あるいは「事件」そのもののインパクトがやや平面的、静態的に捉えられているからだ。

翻って本書では、もう少し多角的、あるいは立体的にこの出来事を描き直してみたい。^{*6}その

ために大きく三つの着眼点を用意した。第一に、一九二一年の日本で起きた、たった一度の出来事としての「サントル事件」を、一九〇〇年代以降のアメリカで繰り返されてきた異種格闘技戦の到達点とみなす視点である。第二に、異種格闘技戦をそれ単独で扱うのではなく、同時代の日米双方における社会や風俗、文化、メディア、価値観などと積極的に結節させて読み解く視点だ。そして、これらふたつの視点から、半ば自動的に第三の視点が導かれる。それは、「サントル事件」を、日米両国にまたがるトランスナショナルな出来事と見るまなざしである。

本書の出発点はアメリカの西海岸としよう。単にサントルがアメリカ人だからそうするのはない。当時、日本にも異種格闘技戦はあったが、それらは総じて柔術・柔道対ボクシングの戦いであり、対レスリングの試合の大半は西海岸に集中していたからである。本論を少し先取りすると、レスリングを興行化するシステムの確立、職業としてのレスラーの成立、観客としての日本人移民のニーズ、という三拍子そとが揃っていたからこそ、対レスリングの異種格闘技戦はこの地に成立したのだ。このように本書では、へなぜ、どこで、どのように異種格闘技戦があったか」という点まで立ち返り、掘り下げることで、「サントル事件」を問い直したい。

それでは、なぜこうしたアプローチを採る必要があるのだろうか。それは、異種格闘技戦の輪郭がどこか漠然としているからだ。異種格闘技戦は、へどちらの格闘技が強いのか」というシ

リアスな問いかけと、その問いを無効化する機制との両極の間を揺れ動く。たとえばアメリカでの異種格闘技戦を見れば、日本人移民は柔術家や柔道家に自らのナショナル리티やエスニティを投影し、したがって試合はある種の殺気を帯びていた。しかし同時にそこには夾雑物きやうざつぶつも紛れ込む。興行としてのスペクタクル性、ギャンブル的な要素、あるいは八百長への疑念などである。そして、厄介かつ面白いことに、こうした夾雑物を抜きにしてもまた、試合は全く盛り上がらないのだ。

舞台を日本に移しても基調は同じである。サンテルの来日と挑戦をめぐる講道館では大騒動が巻き起こるが、それは講道館のシリアスさを示す証拠に他ならない。〈どちらの格闘技が強いのか〉という素朴な問いは、〈柔道家が興行の場でプロと戦って良いのか〉、〈武道とスポーツが交わって良いのか〉、といった厄介な問いを経て、最終的には〈柔道とは何なのか〉という難問アボリアに至る。ところがこうして紛擾ふんじょうする講道館の傍らで、観客たちは物見遊山気分アボリアで試合会場を訪れ、好き勝手の野次を飛ばし、新聞や雑誌はその一部始終をセンサーショナルに報道していた。そして、こうした混沌こんとんや無秩序をもって、はじめて異種格闘技戦の総体は形成されるのである。

「サンテル事件」それ自体と「事件」に至る過程、さらに「事件」の周辺を限られた紙幅で論

じるにはどうすれば良いか。この問題を解決するために、本書では「事件」の本筋として五つの章を設定し、脇道として五つのコラムを用意した。以下、簡単に各章の内容を紹介しておく。

第一章では、一九一〇（明治四三）年前後のアメリカ西海岸の日系社会に飛び込む。そこで異種格闘技戦のリングに立つのは、二人の柔術家と一人の柔道家。三者三様のドラマの果てに行き着くのは禁断の日本人対決だが、驚きの顛末は試合の先に待っている。コラム1ではアメリカにおけるプロレスの黎明期を紹介しよう。なお、本書では現在の意味でのプロレス／プロレスラーと、当時の職業レスリング／職業レスラー（もしくは単にレスリング／レスラー）とを便宜的に区別するが、その理由もこのコラムに書いてある。

第二章からは、満を持してサントルが登場する。対峙するのは、自ら一流を興して八段を称した柔術家の野口清と、講道館きつての猛者たる柔道家の伊藤徳五郎。勝敗をめぐって一喜一憂する日系社会は、同時に敵役たるサントルにもシンパシーを抱いていく。コラム2では、海を渡った伊藤の奮闘の日々と異種格闘技戦の実際について、貴重な写真と共に紹介したい。

第三章でサントルの首を狙うのは、柔術家の三宅太郎、伊藤門下の坂井大輔、三宅に弟子入りした高橋精造だ。異種格闘技戦の波はますますうねり、その脈動は西海岸のレスリング界か

ら追放されたサントルの動向とも連動する。コラム3では、国際興行師の櫛引弓人くしびきゆみとを紹介しよう。サントルの日本興行で重要な役割を担った櫛引はまた、大衆消費社会のとは口に差し掛かった戦間期の日本を論じるうえで格好の題材ともなる。

第四章では、いよいよ「サントル事件」そのものが主題となる。試合までのドタバタ劇や試合内容をめぐる報道に加えて、本章では興行が開催された背景にも目を向けた。刹那の消費的余暇としての民衆娯楽とアメリカニズムの日本的展開こそ、サントルの試合の成立要件だったからだ。コラム4では、少し視点をずらして、相撲と八百長という点から「事件」に迫ってみよう。

第五章のテーマは、「サントル事件」の事件性である。興味深いことに、この一件を仰々しく「サントル事件」と命名したのは、誰あろう嘉納治五郎だった。それでは、嘉納にとって何が「事件」だったのだろうか。ミステリーを解くカギは、士道会なる町道場の統括団体と、嘉納まなでしの愛弟子だった岡部平太が握っている。コラム5では、靖国興行を主催した武俠ぶきやく世界社の面々にご登場願おう。彼らは「事件」に関わる重要参考人である。

本論に進む前にあらかじめ述べておきたい。異種格闘技戦の歴史を辿たどった先に待ち構えるのは、試合をすることの不可能性、さらには試合そのものの無意味性、という身も蓋もない結論

である。しかし、目を向けるべきはこの無味乾燥な結論ではなく、過程だ。どのような熱情が異種格闘技戦を推し進め、あるいは押し留めたのか。日米両国における多彩な人々によって織り成される物語を楽しんでいたできれば幸いである。

目次

まえがき 歴史の中の異種格闘技戦

3

第一章 二人の柔術家、一人の柔道家

17

――排日運動と異種格闘技戦

柔術ブームの後で／排日をもたらす〈異界〉／異種格闘技戦という非日常／
罵詈雑言の試合会場／不透明な決着／実力派の柔道家／人気を分かつもの／
禁断の対決／低レベルな試合／暴かれた八百長／制裁

コラム1 職業レスリングからプロレスリングへ

48

キャッチ・レスリングの誕生／どう転んでもプロレス／プロレス観戦の「作法」

第二章 ふたつの敗北、二様の意味

——日系社会と柔術家・柔道家

斯界の寵児、帝国尚武会／怪しい通販業者／アド・サンテル、登場／
大言壮語、厚顔無恥／サンテルへのシンパシー／伊藤徳五郎、登場／
三宅太郎、登場／伊藤vsサンテル／失神ノックアウト／日系社会を背負って／
武士道的衝動

コラム2 写真で読み解く異種格闘技戦 88

柔道を普く知らしめるために／異種格闘技戦の貴重な記録／柔道対ボクシング／
帰郷してなお

第三章 相次ぐ挑戦、レスラーの彷徨

——西海岸から内陸部へ

連勝ストップ／サンテル、初黒星／ビジネスマン気質／日本プロレスの系譜／

サントルなお強し／西海岸を離れて／打倒サントル／

「今少し世界的に研究せねば駄目」／デンバーの好敵手／七十数年前のUFC？／
アンダー・ドッグ／彷徨うサントル／最強争いに加われないレスラー

コラム3 〈博覧会キング〉の大風呂敷

133

〈ランカイ屋〉の中の〈ランカイ屋〉／アメリカに出現した大仏と富士山／
プロ野球チームの来日／幻の地下格闘技場？

第四章 シリアスな試合、娯楽としての興行

——一九二一年の日本社会と異種格闘技戦

精励忠実？ 軽拳妄動？／日系社会を追われて／米国レスリング倶楽部／

日系社会からの刺客／講道館の鎖国主義／興行師の抜け目なさ／

気分は相撲観戦／民衆娯楽と興行試合／二日間の激闘／アメリカ通の試合評／

時代の要求／もうひとつの「時代の要求」／興行師の裏切り／

混合技術としての柔道／異種格闘技戦風プロレス

コラム4 相撲と八百長 178

学生相撲と人気作家／天狗倶楽部／大相撲と八百長／サントルと大阪相撲／
庄司の八百長疑惑

第五章 不可能性と無意味性

——「サントル事件」の顛末

処分された関係者／苦境にあった町道場／士道会の柔道家／嘉納の思惑／
失われた原風景／「事件」の主唱者・首謀者？／他流試合から異種格闘技戦へ／
〈冒険と進取〉から〈整理と分別〉へ／柔道日本一／柔道版のアマチュア規定／
純粋なスポーツを求めて／嘉納の裡なる岡部／〈真剣勝負〉と〈真剣な勝負〉／
〈自由〉の在り処

コラム5 『武俠世界』から見た「サントル事件」 224

前田光世のインパクト／主役の交替／山田敏行と針重敬喜／硬式か軟式か／
無意味性／不可能性／〈魯智深〉の大喝／職業としての柔道

- ・資料の引用は原則として、旧字体は新字体にあらため、旧仮名遣いは原文ママとした。また、読みやすさを考慮して句読点を補うなど表記を適宜整えている。
- ・引用中の「」内は、筆者による補足である。